

(高等植物)

種名	指定の理由〔被害の実態等〕	注意事項	備考
オオサンショウモ	サンショウモ科のシダ植物で、浮葉性の一年草。現時点では県内の野生化は確認されていないが、観賞用水草(流通名:サルビニア)として県内の園芸ショップでも販売されており、逸出すれば野生化する可能性がある。兵庫県などで野生化が確認されている。	栽培に当たっては、常に管理下で栽培するとともに、栽培できなくなった場合は、野外へ遺棄することなく適切な処分を行う必要がある。また、野生化が確認された場合は、速やかに除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
オランダガラシ	ヨーロッパ原産。アブラナ科の多年草で、水域で生育する水草である。クレソンの名前で食用として利用されている。繁殖力が極めて強く、条件がよければ小河川の水面を覆うほど生育し、在来種との競合や水路の流れを阻害するおそれがある。世界的に水路の雑草として問題となっている。	既に県内のほぼ全域で野生化しており、完全に除去することは困難であるが、希少在来種との競合が懸念される場合は除去することが必要である。また、県内では食用として意図的に移植したものが逸出し繁茂した事例もあるので、管理できない状況での移植は避ける必要がある。在来種のオオバノタネツケバナ(テイレギ)と酷似しているが、葉の形や果実の向きで区別される。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
セイヨウアブラナ	ヨーロッパ原産のアブラナ科の一年草又は多年草。元々は油糧作物として栽培されていたが、現在では景観改善や観光等の目的で植栽される場合が多い。西日本の河川敷では時に大発生し、県内でも重信川など各地で生育している。大群落となると、春には黄色のじゅうたんを敷き詰めたように見える。セイヨウカラシナとともにナノハナと呼ばれることもある。しかし、河川敷などに繁茂すると在来種と生育地が競合し、これを駆逐する危険性もある。	一般には景観に彩りを添えることから好意的に受け止められているが、一方では本来の在来植生を減少させるという問題点もある。特に自然度の高い地域で繁茂することは好ましいとは言えず、侵入の初期の段階で必要に応じて除去を検討する。	
セイヨウカラシナ	ヨーロッパ原産のアブラナ科の一年草又は多年草。西日本の河川敷ではときに大発生する。本県では1950年代から拡大を始め、既に全県的に分布が広がっている。重信川など河川敷では大群落となると、春には黄色のじゅうたんを敷き詰めたように見える。セイヨウアブラナとともにナノハナと呼ばれることもある。しかし、河川敷の在来種と競合し駆逐する危険性もある。	一般には景観に彩りを添えることから好意的に受け止められているが、一方では本来の在来植生を減少させるという問題点もある。特に自然度の高い地域で繁茂することは好ましいとは言えず、侵入の初期の段階で必要に応じて除去を検討する。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
カミヤツデ	中国南部原産のウコギ科の常緑低木。栽培からの逸出。他県では河川敷などで繁茂し、小型の在来種を被陰するおそれがあるとともに景観的にも問題となっている。	本県では各地で散発的に生育している段階だが、繁殖力が強いので、今後繁茂するようであれば早期に駆除する必要がある。特に自然度の高い地域では好ましいものではない。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)

ヘラオオバコ	ヨーロッパ原産。オオバコ科の多年草で芝生、空き地、路傍、畑地などに生育する。繁殖力が強く河川敷や農耕地で拡大すると在来種と競合するおそれがある。本県では1950年代から確認され、現在では全県に分布している。	現時点では特に問題は生じていないが、繁茂した後での除去は困難であることから、自然度の高い地域で発生した場合は、拡大を監視し、必要に応じて早い段階で除去を検討する。	
アメリカセンダングサ	北米原産。キク科の一年草で、繁殖力が強く、路傍、荒地、耕作地、水辺などに生育して、在来種と競合し、これを駆逐する。	既に全県的に拡大しているが、自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
オオアレチノギク	南米原産。キク科の一年草又は越年草で、繁殖力が強く、路傍、荒地、耕作地などに生育して、在来種と競合し、これを駆逐する。	既に全県的に拡大しているが、自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	
オオオナモミ	北米原産。キク科の一年草で、繁殖力が強く、路傍、荒地、耕作地などに生育して、在来種と競合し、これを駆逐する。ときに溜め池の露出湖岸などで大繁殖する。	既に全県的に拡大しているが、自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は積極的に除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
オオブタクサ	北米原産で別名はクワモドキ。キク科の大型の一年草。河川敷きなど荒地に生育し在来種と競合する危険性がある。また、花粉症の原因植物である。	1950年代から東予で野生化の報告があり、南予でも報告があるが、まだ全県的には拡大しておらず、今後拡大するかは不明である。しかし、本州では蔓延している地域もあるので、確認次第、速やかに除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
外来タンポポ類	セイウタンポポとアカミタンポポである。いずれもヨーロッパ原産の多年草。繁殖力が強く、亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来種との競合のおそれがある。在来種との雑種が全国的に見られ、遺伝的かく乱が既に広く起こっている。	既に全県的に拡大しているが、自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
コセンダングサ	北米原産。キク科の一年草で、繁殖力が強く、路傍、荒地、耕作地などに生育して、在来種と競合し、これを駆逐する。	既に全県的に拡大しているが、自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	
セイタカアワダチソウ	北米原産。キク科の大型の多年草。1940年代以降に全国的に拡大し、県内でも荒地、空き地、休耕地などで普通に見られる雑草となっている。繁殖力が強く生育地を寡占し在来種を駆逐する。	既に全県的に分布しているが、繁茂した後の除去が困難であることから、自然度の高い地域や新たに造成したビオトープなどで発生した場合は、拡大を監視し、必要に応じて早い段階で除去を検討する。蜜源植物として植栽する場合もあるが、風散布種子あることから安易な植栽は避けるべきである。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
ハルジオン	北米原産の多年草でハルジオン、ハルシオンとも呼ばれる。外来種ヒメジオンと酷似している。繁殖力が強く、畑地や果樹園などに生育して在来種と競合し駆逐する。また、除草剤パラコート耐性型もあり、畑地の害草となる。	既に全県的に拡大しており、平地の公園などでは普通に見掛けられる。しかし、まだ侵入していない自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	

ヒメジョオン	北米原産。キク科の一年草又は越年草で、繁殖力が強く、畑地や果樹園、路傍、荒地などに生育して、在来種と競合し、これを駆逐する。	既に全県的に拡大しており、平地の公園などでは普通に見掛けられる。しかし、まだ侵入していない自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
ヒメムカシヨモギ	北米原産。キク科の一年草又は越年草で、繁殖力が強く、路傍、荒地、耕作地などに生育して、在来種と競合し、これを駆逐する。	既に全県的に拡大しているが、自然度の高い地域で在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	
ブタクサ	北米原産。キク科の大型の一年草。河川敷など荒地に生育し在来種と競合する危険性がある。また、花粉症の原因植物である。	1950年代に本県に侵入し、その後、県内各地で確認されているが、全県的には拡大しておらず、今後拡大するかは不明である。しかし、本州ではまんえんしている地域もあるので、確認次第、速やかに除去する必要がある。	
ブタナ	ヨーロッパ原産のキク科の多年草。1940年代から全国的に拡大し、本県では1970年代から拡大を始め、県内全域で確認されている。荒地や緑化法面、路傍などに生育し、拡大すると在来種と競合するおそれがある。	現時点では散発的な確認であり、特に問題は生じていないが、他県では河川敷で増殖した事例があることから、今後拡大するようであれば、必要に応じて除去を検討する。	
ツルニチニチソウ	南ヨーロッパ、北アフリカ原産のツル性の多年草。観賞用、グランドカバー用として栽培されているが、逸出したものが野生化しつつある。花がきれいであることから野生状態でも容認される場合が多いが、繁茂すると在来植物と競合するおそれがある。	苗の不用意な投棄は避ける必要がある。また、自然度の高い地域において繁茂状態は好ましくないもので必要に応じて除去する。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
ランタナ	南米原産でシチヘンゲなどの別名を持つ。クマツヅラ科の常緑低木で、茎はツル状に伸びて、周囲の在来植生を変質させる。観賞用として栽培されているものが逸出したものであるが、種子によっても繁殖する。	まだ本県では野生化は断片的である。今後の拡大は不明だが、海外では野生化が問題となっていることから、拡大し在来種との競合が懸念される場合は、除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
アメリカネナシカズラ	北米原産。ヒルガオ科の一年草のツル植物。海浜、河川敷などの乾燥した荒地に生育し、キク科、ウリ科、ナス科、シソ科、アブラナ科など多種類の植物に寄生し生育を妨害する。	既に県内各地に拡大しているが、自然度の高い海浜等で、在来種との競合が懸念される場合は、積極的に除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
ハゴロモモ	スイレン科の多年草で、沈水性。現時点での県内の野生化は不明だが、観賞用水草(流通名:フサジュンサイ、カボンバ、グリーンカボンバ、金魚藻)として観賞用水草として販売され、多用されている。本州以南の各地で野生化しており、野生化すると在来水草と競合するおそれがある。	栽培に当たっては、常に管理下で栽培し、栽培できなくなった場合は、野外へ遺棄することなく適切な処分を行うことが必要である。また、野生化が確認された場合は、速やかに除去する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)

外来ノアサガオ類	<p>在来のノアサガオに極めて近縁であり、宿根アサガオ、琉球アサガオ、オーシャンブルー、西表アサガオ、クリスタルブルーなどの流通名で販売されている。花期が長く、昼間も咲くことから、近年、壁面緑化などで多用されている。開花しても多くの場合は結実しないが、強健で耐寒性もあり、栄養繁殖で繁茂し周囲の植生を被圧する。</p>	<p>県内各地で逸出し野生化しているが、現時点では深刻な被害は発生していない。管理できる範囲での栽培には問題はないが、管理の放棄や不用意な苗の投棄は避ける必要がある。</p>	<p>環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)</p>
キウイ	<p>マタタビ科のツル性の落葉樹。中国原産のニュージーランドで改良された果樹であり、本県は全国第一位の産地である(2007年度)。耕作放棄地などからツルが伸び出して周囲の植生を圧迫する可能性がある。</p>	<p>栽培を中止する場合は、ツルが周囲に伸び出さないように管理する必要がある。実生による拡大は不明である。</p>	<p>環境省「生態系被害防止外来種リスト」(産業管理外来種)</p>
イタチハギ	<p>原産地は北米で、別名はクロバナエンジュ。マメ科の落葉低木で高さは2mほどになる。乾燥地でもおう盛に生育するため、1940年代以降に道路工事の際の法面緑化用に採用され、県内でも各地で多用されている。県内では顕著ではないが、他県では逸出し野生化が報告されており、その場合は在来種との競合が発生する。</p>	<p>自然度の高い地域での法面緑化樹としては避ける必要がある。また、逸出し野生化が確認された場合は、速やかに除去する必要がある。</p>	<p>環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)</p>
ハリエンジュ	<p>原産地は北米で、別名はニセアカシア。マメ科の落葉樹で高さは25mになる。やせ地でも生長が早く、耐乾性も強いので、斜面安定用、砂防用、街路樹、蜜源植物として、県内各地で植栽されている。地下茎を伸ばしておう盛に繁殖するので、短期間で樹林を拡大し、周囲の在来植物と競合する。</p>	<p>荒廃地の緑化には優れた樹木であるが、今後の新たな植栽は極力、避けるとともに、既存の樹林も在来種との競合が深刻であれば分布拡大の抑制や除去が必要である。</p>	<p>環境省「生態系被害防止外来種リスト」(産業管理外来種)</p>
トウネズミモチ	<p>中国原産のモクセイ科の常緑高木。大気汚染に強く移植が容易で生長が早いので、1960年代から街路樹や公園樹として多用されている。種子が鳥に運ばれるので容易に野生化して、在来の植生に影響を及ぼす可能性がある。近畿地方では河川敷に本種の樹林が形成されるなど野生化が報告されている。</p>	<p>既に県内全域で緑化木として多用されているが、現時点では野生化は問題となっていない。そのため既存木については当面は静観することとし、周囲の樹林での野生化が顕著であれば野生化した株の除去などを検討する。また、自然度の高い地域では本種の新たな植栽は避けることが望ましい。</p>	<p>環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)</p>
キシウスズメノヒエ	<p>北米原産。水湿地に生えるイネ科の多年草。1950年代ころから本県でも拡大し、現在は全県的に分布する。湿地に繁茂すると水面を覆い、在来の水草と競合し、これを駆逐する。韓国では輸入禁止植物とされている。</p>	<p>繁茂した後の除去が困難であることから、自然度の高い地域の湖沼・水路や新たに造成した池ビオトープなどで発生した場合は、拡大を監視し、必要に応じて早い段階で除去を検討する。</p>	<p>環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)</p>
シナダレスズメガヤ	<p>南アフリカ原産で別名はウィーピング・ラブグラス。耐乾性に強く、法面緑化のために多用されている。荒地や路傍で野生化しており、特に河川敷にまんえんすると砂のたい積を進行させるとともに河川敷に生育する在来種と競合する。</p>	<p>全国的に問題となっているが、中国地方や徳島県などの河川敷で問題となっており、法面緑化での採用は慎重にすべきである。また自然度の高い地域では必要に応じて除去する必要がある。</p>	<p>環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)</p>

メリケンカルカヤ	北米原産のイネ科の多年草。耐乾性が強く、荒地、路傍、あぜなどに生育し在来種や農作物と競合する。	既に全県的に拡大しているが、自然度の高い地域において在来種との競合が懸念される場合は積極的に除去する。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
ノハカタカラクサ	ツユクサ科の多年草。南米原産で観賞用に導入され、逸出し、西日本で分布を拡大している。茎がツル状に伸びて在来の草本群落や林内に侵入し在来種と競合する。	栽培に当たっては、逸出を起こさない適切な方法で行うことが重要であるとともに、苗の野外への投棄は避ける必要がある。また、在来群落内で野生化し在来種との競合・駆逐等のおそれがある場合には、積極的に防除する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
オオカナダモ	南米原産。トチカガミ科の沈水性の多年草。アナカリスや金魚藻として販売されている水草である。日本には雄株のみであり種子繁殖はできないが、殖芽や茎の断片から容易に栄養繁殖をする。既に県内の各地の水路で繁殖しており、在来水草と競合し圧迫している。	自然度の高い河川や池では積極的に除去する必要がある。栽培に当たっては、枝葉が河川に流出しないように管理する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
コカナダモ	北米原産。トチカガミ科の沈水性の多年草。日本には雄株のみであり種子繁殖はできないが、殖芽や茎の断片から容易に栄養繁殖をする。既に県内の各地の水路で繁殖しており、在来水草と競合し圧迫している。	自然度の高い河川や池では積極的に除去する必要がある。商品として流通していないが、魚類の移動などによって他の水系に移動するおそれがある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
ホテイアオイ	ブラジル原産で別名はホテイソウ、ウォーターヒヤシンス。ミズアオイ科の浮遊性の水草で、冬期には大部分が枯れるが、翌年には再びおう盛に繁茂し水面を覆い尽くし、沈水性の水草を被陰して生育を阻害する。近年まで観賞用に園芸店で販売されており、逸出した株が県内各地の湖沼で確認されている。	大部分が栄養繁殖であるが、いったん、繁茂した場合は根絶することは容易でなく、栽培者は厳重に管理するとともに不用意な湖沼への投棄は厳に慎むべきである。また、湖沼で生育が確認された場合は、増殖する前に速やかに除去を検討する必要がある。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)
タカサゴユリ	台湾原産の多年草で観賞用に持ち込まれたものが逸出した。本県では1980年代から拡大を始め、特に高速道路など道路法面では急速に分布を拡大している。自然度の高い地域では生物相の混乱を来すことから、他県では名勝や自然公園において繁茂し除去している事例もある。	本県では各地の道路法面に生育しており、景観的には好意的に受け止められている場合が多い。しかし、繁殖力が強いので、特に自然度の高い地域では好ましいものではない。一部では観賞用で意図的に路傍に植栽することは避けるべきである。	環境省「生態系被害防止外来種リスト」(総合対策外来種)